

第一部 『權争物語』論

第一章 スターンの〈書くこと〉の始まり

ローレンス・スターンの『トリストラム・シャンデイ』に至る前史は、一七五九年の一月、『トリストラム・シャンデイ』第一巻の執筆直前に発表された諷刺的作品、『権争物語』の成立過程を探ることによって、おおむねその内容を知ることが出来る。但し、『権争物語』の世界が『トリストラム・シャンデイ』の世界のミニチュアであって、『権争物語』の自然な発展が即ち『トリストラム・シャンデイ』の世界であるという訳ではない。この二作品はそもそも同列に扱うことが困難なほど、それほど『トリストラム・シャンデイ』の世界は独自であるからである。然しローレンス・スターン文学の形成においてこの『権争物語』の果たした役割は決定的に重要である。すべての作家においてその処女作が作家の根本的問題の萌芽を持つという意味で重要であるように。

従来この『権争物語』に対して与えられた評価は、スターンの作家的才能の発見の鍵となったという点と、この物語の発想をスウィフトの『桶物語』（一七〇四年）やニコラ・ボワローの『見台物語』 *Le Lutrin*（一六七四年）に借りていることから分かるように、スターンのこれら諷刺的作家との近親性という二点において大体なされて来

たと言える。小論の課題はこれらの評価の内実を探ること、そして『権争物語』に対してもう一つの評価を与えることである。この後者の問題はスターンにおける笑いに関わることである。

一

『権争物語』を書いているスターンはいわば未成の作家であつて、未だこのヨークの教区牧師の頭の中にはシャンデイ・ホールの世界は創られていないと考えなくてはならない。スターンの仕事は、トリストラムや父ウォルター、トビー叔父、トリム伍長、ヨリック等々といった愛すべき人物達をシャンデイ・ホールに呼び集めて活躍させることではなくて、ヨークあたりの教区で説教をし、教会における裁判を司ることである。スターンは二十五才でヨークシャーのサトン・イン・ザ・フォレストの教区牧師に任ぜられ、以後二十九才でサトンに近いステイリントンの教区牧師を兼任、これと前後して「治安判事」となり三十七才の時、「巡回裁判説教」をしたり、三十八才（一七五一年）の時「ピカリング・ボクリントン特別教区法廷主教代理」といった要職に任ぜられている。『トリストラム・シャンデイ』を書くまでのスターンは教会人としてその地位と地方的名声を次第に上げて、ヨーク大主教を務めた曾祖父リチャード・スターン（一五九六？—一六八三）の威光もあつてかヨーク地方の名士としておおむねその職務に忠実であつたと思われる。スターンの職務内容は受持ちの教区を巡回して説教すること、教会のもう一つの重要な機能であつたところの教区内における事件の裁判処理に当たることであつた。聖職者兼裁判官としてのスターンは遺産の証明や、非国教徒の集会許可、床屋に安息日の営業を許すこと、農夫に対する教会払込金の要求、不法

な結婚をした牧師や、教会の補修を怠った地主たちに対する懲戒、などをその務めとしていたが、中でも最も多かったのは女性の不義密通事件であった。⁽¹⁾ 被告は独身のものが多く、それらは、孕んだ子の父親の名を言わぬ反抗的な女や、あるいはその父親の名を言いあてることも出来ぬ、知能にハンディを負った不身持の女——大抵は性病罹患者であった——などであった。被告は有罪を宣告されると、公衆の面前で悔い改めのための「告白」をしなければならなかった。もしこれを拒めば破門宣告(excommunication)を受けた。この「告白」の儀式は今では完全に廃された、恐らくは中世にその源を持つ奇妙なやり方でなされたとされている。治安判事としてのスターンはその処理した事件約六十件の内ただ二件のみが応訴されたといわれるほどおおむねフェアな扱い方をした。密通事件の裁判の中の一つのエピソードはジェイン・ハーボトル]ane Harbottleの事件である。この女は無一文の一種の娼質者(moniac)で、三人目の私生児を生んで告訴され、スターンはこれに罰金を命じたが、実際にはこの憐れな女からは何も取り上げなかった。教会がそれを暗黙の内に許してもいたからである。従ってこれはスターンの人情味豊かな個人的感情を物語るエピソードであるが——この女は『センチメンタル・ジャーニー』の中の狂女マライアのイメージを持たないであろうか——、また当時の教会の情況の一端をも物語っているのである。

王政復古後のスターンの頃に至る間の教会内部は、地位昇進や告訴のみ消し等のための贈収賄の横行が目にあまつたといわれる。僧職は要するに一つの職業であり、終生の生活保障が或る地位(例えばこの『権争物語』において、主人公トリムとして登場させられ、擲揄嘲弄的にされるフランシス・トバム博士という人物が求めた「代理牧師」等の特許もそれである)によって得られるとなれば、そのための画策を労するのは人情であったと解すべき

であろう。そしてそのような野心のために教会内部での勢力争いが持ち上がったのも成り行きであったであろう。こうした教会内部が激しい世俗化の波を被ってゆく過程をわれわれは近代化という言葉でひとまず了解しておこう。当時の教会内部の、即ちスターンが職業人として生きていた世界の了解事項の多くはわれわれの目にはもはや隠されてしまっているといわねばならない。

教会人にとって昇進は要するに生きがいであった。スターンもまたこの昇進欲から自由ではあり得なかった筈である。即ち『権争物語』を書くきっかけとなった教会内の勢力争いにスターンが加わった背景には、スターン自身の論争好きの性格の他に、彼の牧師としての地位昇進への政治的動機や野心が働いていたものとも見られるのである。スターンだけがフェアな身過ぎをやっていた訳ではなかったことについては次のような、A・H・キャッシュの、笑いの消滅という現象とからみ合わせた評言があつて参考になる。

Sterne himself eventually decided that he had been unfair. The laughter at lawyers and dignitaries in *Tristram Shandy* stops after Volume IV, which appeared in January 1761, only two years after the *Romance*. In December of that year, when he was preparing to go abroad, Sterne wrote a note to his wife in which he asked her not to republish *A Political Romance* after his death: "I have hung up Dr Topham, in the *Romance*——in a ridiculous light——w^{ch}, upon my Soul I now doubt, whether he deserves ⁽²⁾ it."

然し興味深いことは、スターンが『トリストラム・シャンディ』の作家となつてから（即ち一七五九年以降）は、教会の方の勤めは代理にまかせてヨークを離れることが多くなつており、それにつれて宿病の咯血に襲われるようになつてゐることである。スターンは時に四十六才であり、遅い作家的出発ではあつたが、この時期から彼の生きることと書くことが本質的な関わりを持ち始めて来たのだと解すべきであろう。現実からの退却と肉体の崩壊とを引替えにしてスターンにおける〈書くこと〉が始まつたのだと言える。伝記的な事実をさらに言えば、この時期から、かねて不仲だつた妻エリザベスは精神異常を来たし正常な夫婦生活を営めなくなり、また母アグネスと叔父ジェイクス（スターンはこの叔父とも確執があつた）が相次いで亡くなるということがある、スターンの憂鬱はいや増し、同時にいわゆるスターンの恋愛遊戯（Firtation）への誘惑もその反動として強まつたであろう。だがこれらの個人的・氣質的体験が彼の〈書くこと〉の上に意味を持ち始めるには少しく『権争物語』の出現は早すぎたと言えるであろう。

二

『権争物語』が以上に述べたようなスターンの長い教会人としての公的経験の中から以外に生まれようが無かつたことは確かである。即ち『権争物語』は教会内部の地位・権力争いから生まれて来た諷刺的パンフレットであつて、そのきっかけは外在的である。スターンはこれを外的必然によつて書かされたと見た方がよいであろう。以下はその『権争物語』執筆までの現実の経過の大略である。

教会の内紛の発端は『権争物語』が出た十二年前にさかのぼる。即ちスターンの大学時代の友人にジョン・ファウンテン John Fountain² のがおり、一七四七年「首席司祭」Deanに任命された。その頃からこの司祭とヨーク大主教であったハットン博士 Dr. Hutton という人物との間に大聖堂の説教壇の「カギ」³ のことで対立が起り、スターンはこの時ファウンテンの側についた。その二年後の一七五一年にスターンは前述した「ピカリング・ポクリントン特別教区法廷主教代理」の二つの地位に、ファウンテンの配慮によって就くことになる。ところでここにフランシス・トパムという野心的な教会弁護士がいて、以後の「事件」の中心人物となるのである。彼はスターンが「代理牧師」の地位を得たことについて、ファウンテン司祭はじつは自分（トパム）にそれらを約束していたのにその約束を裏切ったという噂を流す。二、三ヶ月後ある酒商のヨーク駐在にちなんで晩餐会が開かれ、その場にファウンテンの一派もトパムもスターンも、その他の参事会員達も出席した。この席上ファウンテンはトパムを「吊るしあげ」にし、確かに約束はしたが、その後ある人のために件の「司教代理」の地位は却下したのであり、又「代理権」を与えるのは私の義務ではないと釈明、トパムの言い分をくつがえしてやり込め、「悪党」'Souldiel' 呼ばわりさえするという次第になった。スターンは未だこの時はこの騒ぎを面白がつて眺めている傍観者にすぎない。事件は首席司祭の方がトパムを黙らせて一応ケリがつき、以後の七、八年間ヨークの宗教界には事件らしい事件はない。スターンはサトン・イン・ザ・フォレストの牧師館で比較的平穩な生活をしたと思われる。一方、トパムの方はこの恨みを忘れることはなかったのである。

以上の事件が『権争物語』の中では「半ズボン」'An old-cast-Pair-of-black-Push-Breeches'（つまり「ピカリン

グ・ポクリントン特別教区法廷主教代理」を指す)をめぐる争いとして扱われているものである。

扱ってスターンにパンフレットを書かせた事件は次のような次第による。即ち前の事件の六年後、一七五七年にヨーク大主教がハットン博士からギルバート博士 Dr. Gilbert という人物に代ると、トパムが再び活躍を始め、この新しい大主教に取り入って世話をやいたり、ファウンテン首席司祭の一派は風変わりな連中だから気をつけるように、などとおせっかいを言う。これはつまりトパムに下心があつたので、彼は自分の息子のために「財務裁判所及び遺言事件裁判所の代理」の特許を取っておこうとしたのである。気の弱いギルバート博士は翌一七五八年トパムの申し出を受け、つい承知してしまいが、あとでこのことを疑いはじめる。『権争物語』ではこの特許は「外套」「Watch-Coat」として、ギルバート博士は「the parson」として、前のハットン博士の「the late parson」とは区別されて登場するものである。この新しい大主教は、この特許は首席司祭と参事会の同意無しには与えられないのではないかと考え、トパムの申し出の問題について明確にするため首席司祭とトパムその他の人々を呼んで協議をする。その結果トパムが申し出たように件の特許の世襲は許されず、一代限りとすることが決定される。この前にトパムは旧敵の首席司祭に働きかけて今度の特許のことはよろしく頼むといったことを恥知らずにも言っているがファウンテンは冷たくこれを断わっている。これでトパムは息子のための特許が取れなくなった訳で、七年前の恨みごとも重なつてついにこの野心家はパンフレット合戦の口火を切ることになる。この論争の中で出されたパンフレットは三つである。それらの題名及び出版日は次のようである。(1)~(3)までの時間的開きが少ないことに注意。)

- (1) Dr. Francis Topham Ⓞ Ⓞ : A LETTER Address'd to the Reverend the DEAN of York; In which is

given A full Detail of some very extraordinary Behaviour of his, in relation to his Denial of a Promise made by him to Dr. TOPHAM. York: Printed in the year MDCCLVIII.

(一七五八年十二月十一日)

② Dr. John Fountayne の ③ : *An ANSWER TO A LETTER Address'd to the DEAN of YORK, In the NAME of Dr. TOPHAM.* York: sold by Thomas Atkinson, Bookseller in the Minster-yard. MDCCLVIII.

(同年十二月二十五日や題知し題おなへ)

③ Dr. Topham の ④ (no sign): *A REPLY TO THE ANSWER TO A LETTER Lately addressed to the DEAN OF YORK.* York: Printed in the year MDCCCLIX.

(一七五九年一月十三日の直後)

この最後のエントムのペンフレットの中心で、②の「筆おのひなる論文」「nerveless prose」や「the Child and Offspring of many Parents」でもよくその「全然なつていふ文章」が合作であることを示すはぬが、その「親」の一人にスターンの名を挙げたことからスターンも黙っておれなくなり、トパムに対する反駁のペンフレットを書くことになったのである。他ならぬそれが、一月二十日に出されたこの『権争物語』 *A Political Romance, Addressed to _____, Esq; of York To which is subjoined a KEY.* (January 20, 1759) である。このタイトルのはじめは次のようなエピソードが付されている。

“Ridiculum acri/Fortius et melius magnas plerumque secat Res.” (笑いは大事を田圃に解決するに当たり、諷

刺の辛辣なるに優る⁽⁴⁾

このホラティウスの言葉がスターンの△書くこと▽の最初の姿勢をいわば決定づけたと言つてよい。『権争物語』を書くに至つた動機はトパム攻撃ということにあつたが、彼はいつの間にか諷刺よりは茶番劇に、事実よりは虚構に、つまり、面白おかしく語るその語りということ自体に関心を向けていた。例えば、後で一言するように『権争物語』の中の『鍵』の章“The Key”の部分ではもはや相手攻撃の諷刺の意図はのりこえられていて、『トリストラム・シャンデイ』の基調である登場人物達の「意見」による狂詩文とヒューマーの表出にスターンの△書くこと▽は行き当たつていると言えるからである。

スターンの関心はそのような方向を向いていたが、『権争物語』の諷刺の効果は予想以上に上がつて、その諷刺がきすぎたために、相手のトパムには、もしこれを公表しないと約束すれば自分のこれ迄の言い分はとり消す、と言わせ、又いつぼう教会の当局方にも、この公表によつて教会内部の腐敗の印象を世間に与えるという危惧を抱かせることになり、当局から出版を見合わせるよう説得を受ける。スターンは結局これを受け入れ、五百部ほど刷られてヨークの本屋に出回つていた分も印刷屋の残部も回収されてついに焚書の憂き目を見ることになるが、このうち四部だけはかろうじて残り、スターンの死後これは『夜番外套物語』と改題されて出版されることになる。またこの焚書でもつて論争にピリオドがうたれたのである。

ところでスターンは自分の書き物が与えた効果の大きさに自信を得、これ以後彼の血の中には△書くこと▽の悪魔が入り込んでしまうのである。つまり、驚くべきことに、スターンは『権争物語』の事件の直後、一七五九年の

一月の末の十日間の間にもう『トリストラム・シャンディ』の執筆にとりかかっており、六月には第二巻の草稿を仕上げている。この『トリストラム・シャンディ』へ至る前史を飾る最後の十日間のことについてわれわれは、その極めて短時日の間にスターンの内部に急激な集中力が生じて『トリストラム・シャンディ』の世界がイメージを結んだのであろうと推測することが出来るだけである。あるいは、一七五九年一月の終わりの十日間に突如ロレンス・スターンにおいて△書くこと▽が真に——つまり彼の本来的な生と書くという行為が抜きさしならぬ関わり方をもって——始まり、その△書くこと▽が『トリストラム・シャンディ』その他の人物とその周りのシャンディ・ホールの世界に遭遇したのだと言えようか。この十日間こそはスターンが未成の作家から『トリストラム・シャンディ』の作家へと変身する時期であつて、『権争物語』はそのさいの強い外的うながしとなり、そして結論を先に言えば、ホラティウスの言葉に見られる△笑い▽の精神の、書く行為の中での発見こそがそのさいの内的うながしとなつたであらう。

三

以上見たのは『権争物語』の成立過程である。次にこの作品の形式と意味に関して若干の考察を加えたい。
『権争物語』の全体の構成は次の五つの部分から成っている。即ち、

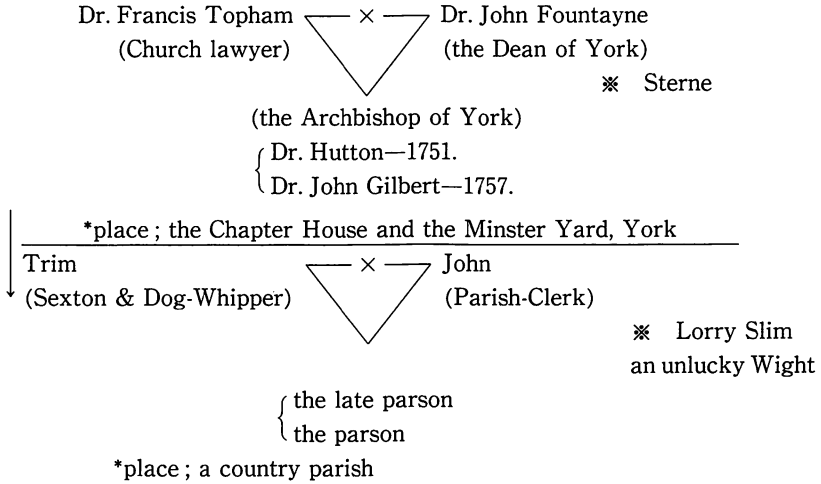
- (1) "A Political Romance"
- (2) "Postscript"

- (3) "The Key"
(4) "To _____, Esq; of York"
(5) "To Dr. Topham" } (Jan. 20, 1759)
- という順序である。

主要な眼目は勿論(1)の「ロマンス」に置かれている。(4)(5)は一月二十日印刷屋に渡す直前に書いた実際の手紙であり、(4)は印刷屋のシーザー・ウォード Caesar Ward宛、(5)は見る通りトパム宛である。(1)(2)も又書簡の形式を取っており、(3)だけが客観描写による物語である。(1)(2)でこれまで述べて来た教会内部での争いを寓意形式で諷刺している。ここでは現実の事柄から外れて寓意化された人物・事物は描かれていない。つまりそれらの間には明確な対応関係が出来ている。

いまそれを示すと次のようになる。上段は実際の人々、下段は『権争物語』の中の人物である。現実の人間たちが寓意の世界では、場所までも含めて、すべて格下げされていることに注意すべきである。

この『権争物語』が格下げによるアレゴリーである例はこの他にも、例えばトパムが息子のために狙った特許の事件の場合、'patent'→'Watch-Coat' 息子 Edward→アットの妻 'Commissary of the Exchequer and Prerogative Courts'→ベチコートとジャケットといった図式にも見られる。



『権争物語』 対応関係図

(3) はヨークのある小さな政治クラブで(1)の「ロマンス」が読まれ、そこにいる種々の階層の者たちがこれについて得手勝手な自由な連想のままに各々の意見(opinions)を披露している場面の描写であり、そのヒューマラスな狂想曲風の意志疎通の閉塞状況‘discommunication’の有様はすでに充分に『トリストラム・シヤンデイ』の世界を予想させるものとして重要であろう。しかしこの描写の主体は明示されてはいない。『トリストラム・シヤンデイ』におけるトリストラムが不在であるといったふうである。見方を変えれば(1)において△書く行為▽は「他者攻撃用パ

「インフレット」という前提条件を与えられている。ところが(3)において、そのような条件はもはや考えられてはいず、
△書く行為△は自由な展開の場を虚構の中に獲得していると言うことが出来る。

『権争物語』の構成においては統一視点はなく、形式も自由であって、実際の手紙を作品として組み入れるといった破格を行っている。而もスターンは自らこれを一個の作品として見なすことを確認していた、⁽⁶⁾それも珍奇な型「curious Pattern」のものとして。この破格な構成を充分に意識している裏にはスターンの道化ぶりをうかがうことが出来る。そこには明らかに諷刺の意図よりは笑いの意図があるであろう。

形式の問題をまとめると、題としてつけた“A Political Romance”はもはや中世風冒険譚のニュアンスとは無縁であって、“The Key”の章で使われている意味を考えると、それはアレゴリーに近いと考えられる。しかしアレゴリーを、教訓的意味を本来的に持った宗教・道徳的寓喩として考えると、そのジャンルからこの『権争物語』は少し外れる。この作品の基調は笑いの意図を持たせられたその語り口にあって、教化的と云うよりは道化的（自意識の舞踏としての道化ぶりが発展していくのは『トリストラム・シャンディ』、『センチメンタル・ジャーニー』の方であることは勿論のこととして）であるからである。しかし『権争物語』における笑いは調和を意図されたものではなく、それは他者攻撃用の武器としてむしろ意図されている。笑いが諷刺の武器として使われているのである。全体として見れば『権争物語』の意図はやはり諷刺にあるのであって、しかしその意図がヒューマーの表出によって和らげられてしまうという点にこの作品の特質があるのである。

『権争物語』における諷刺の方法は前述した如く、「格下げ」の方法であるが、結局このことは、偉大(great)に

見えるものがじつはつまらない (small な) ものに過ぎないという、世界を相対的に見るスターンの認識を示すものであり、このことと彼のヒューマールの精神及び「笑いの哲学」とは無縁ではない。スターンの諷刺はスウィフト流に弾劾的で絶望的・破壊的ではなくて、その背後にはこやかな寛容精神 'smiling generosity'⁽⁷⁾ が隠されている。それが『権争物語』のような他者攻撃用のパンフレットの場合でも、そのどこかに顔を出すのである。スターンにとって諷刺とは喜劇であつて、彼はこの世界のささいな (trifle な)、ばかばかしい (absurd な) もの——トリムが懸命に求めた地位も又そうである——によつて人間が如何に誤りやすいかを絶望せずに見ている。はじめの引用 (注 2) にあげた個所の最後の手紙の文句は、彼が一七六一年大啖血をして転地療養のため大陸旅行を決意し、国外で死ぬ事態を考えて妻に書いた遺書の一節であるが、引用部分の文脈とは切り離して考えて見れば、要するに彼は常にいわば死者の側に立つて物を見るような認識を得ていたのではあるまいか。そしてさらに『権争物語』の扉に付されたホラティウスの言葉——それはそのまま『トリストラム・シャンデイ』の精神である——はこのことの宣言として読めるのではあるまいか。

スターンにおける「書くこと」∨がこのエピグラフに見られる精神を獲得したこと (つまり笑いの精神の発見ということ) が、結局この『権争物語』の意味するところである。この時笑いと、彼が『トリストラム・シャンデイ』を書いてゆく場合の内的うながしであり、彼の方法であつた。「書くこと」∨が自己発見につながる行為であることを、一七五八年末から五九年初めにかけてのわずか一ヶ月にも満たぬ間に、スターンは示したのである。

注

トノストルチ' A SENTIMENTAL JOURNEY Through France and Italy to which are added THE JOURNAL TO ELIZA and A POLITICAL ROMANCE. Ed. Ian Jack (Oxford : Oxford Univ. Press, 1968, 1984) 小説題トナド。返語 宛事頭トナド・ト・ノロスノエ・ト・キヤンソノ返語ト蒙トナド。

- (1) Arthur H. Cash, "Sterne as a Judge in the Spiritual Courts: The Groundwork of *A Political Romance*," in *English Writers of the Eighteenth Century*, ed. John H. Middelndorf (New York & London : Columbia Univ. Press, 1971), p. 19 et al.
- (2) *Ibid.*, p. 25. 小説題トナド Letters of Laurence Sterne, ed. L. P. Curtis (Oxford : Clarendon Press, 1965), p. 147 参照。
- (3) *A Political Romance*, p. 205. 'John's Desk' ヲトナドトナド。
- (4) Horace, *Satires*, I. X. 14-15. (Loeb Classical Library, p. 116 = 'jesting oft cuts hard knots more forcefully and effectively than gravity.') トナドトナド (III) 参照。
- (5) Lodwick Hartley, *Laurence Sterne, A Biographical Essay* (Chapel Hill : Univ. of North Carolina Press, 1968), p. 72 : 'From now on the demon of writing was to be in his blood.'
- (6) "Letter To? Caesar Ward," *Letters of Laurence Sterne*, p. 68.
- (7) Henri Fluchère, *Laurence Sterne : From Tristram to Yorick*, translated and abridged by B. Bray (London : Oxford Univ. Press, 1965), p. 206.

第二章 『トリストラム・シャンデイ』への道

——〈鍵〉としての『権争物語』

モチーフとしての〈鍵〉

ナボコフの卓抜な『文学講義録』（二九八〇年）の第一章『マンズフィールド・パーク』論の中に、作家が「引用」する場合の「記憶」の利用の仕方に関わって、ジェイン・オースティンとローレンス・スターンとの興味深い対照が行なわれている。『マンズフィールド・パーク』の前半のクライマックスの一つをなす「サザトン・コート訪問の場」（Vol. I, Ch. 10）で、ヘンリー・クロフフォードとマライア・バートラム、エドマンド・バートラムとメアリー・クロフフォードの二組の男女に、初めて二人きりのデートの機会が訪れる。サザトン・コートの「森」を区切る「鉄門」に向かい合ったベンチには、ファニー・プライスが「疲れて」坐りこんでいる。その前でマライアは、婚約中であるが内心その凡愚さを疎んじているジェイムズ・ラッシュワースを避けて、ダンデイのヘンリーといっしょにその門を出て、外より広い自由なパークへ行きたいと思っている。しかしその門には「鍵」がかかっている。ラッシュワース氏が、婚約者の権利・義務としてその鍵を取りにやらされる。残ったマライアとヘンリーの間

に恋愛遊戯の空気が流れて、マライアが言う。

“Yes, certainly, the sun shines and the park looks very cheerful. But unluckily that iron gate, that ha-ha, give me a feeling of restraint and hardship. I cannot get out, as the starling said.” (イタリツクは筆者)

これを受けてヘンリーは、自分が手を貸せば「門の端から楽に廻って行ける」こと、もしマライアがもつと「自由」になりたくて、「それを求めていることを禁じられている訳ではないと思さえすれば」それが可能であること、挑発的に述べる。トニー・タナーも言うように、「門」は「文明生活の慣習が課している厳しい拘束の完璧な象徴」であり、また「鍵を掛けた庭」には、中世の絵にしばしば示されるような「処女性」が暗示される。「孤立の中の忍従」(‘tenacity’)を強いられたフアン・プライスの懸念をよそに、小さな主題としての「姦通」が、ここに予示されている。⁽¹⁾

マライアが「引用」した‘cannot get out’という台詞は、スターンの『センチメンタル・ジャーニー』の中の「パスポート、パリのホテルにて」の章に出て来るものであるが、ナポコフはこの言葉を、ジェイムズ・ラッシュワースと婚約したマライアの心中の「不安」と「不幸」を表わすものと説明する。

『センチメンタル・ジャーニー』におけるそのエピソードとは、対仏七年戦争下にもかかわらず、主人公ヨリツクが旅券を持たぬまま、カレーからモンリュユ、ナンボン、アミアンを通じてパリに到着後、オペラを観たり、行き

ずりの女性とのちょっとした恋愛遊戯を楽しんだりしたあと、宿に帰って召使いのラ・フルールから「警部補」が調べに来たことを伝えられた時のことである。宿の主人が、もし旅人が旅券も持たず、また旅券を取るためのスポンサーもない場合には、バステイーユ監獄へ閉じ込められることになっていることを警告として述べたので、すっかり怖じ気づいたヨリックは、この牢獄のイメージが惹き起こした陰惨な (*sombre*) 連想を、「バステイーユ」監獄の内容に直接自らを対峙させるよりは、「バステイーユ」という「言葉」そのものを、「城塞」(*a tower*) → 「外に出られない家」(*a house you can't get out of*) → 「痛風患者」(*gouty*) → 「ペンとインクと紙と忍耐力」(*pen and ink and paper and patience*) による生活 (ここでは獄中のセルバンテスを意識しているであろう) といった心中の連想作用に乗せ、そうして恐怖の念を分散させることによって打ち消してゆくうちに、ふと「I can't get out」という声を現実の声のように聞くのである。それは籠の中の椋鳥の鳴き声であり、この椋鳥は捕われの身の具現者としてヨリックのあり得べき姿を示すと同時に、ヨリックの中に深い愛情をも呼びさまさせるのである。ここに『センチメンタル・ジャーニー』全編の主題としての「sentimentalization」のパターンが表われることになるが、ここではまた、ヨリックの連想作用が「物」や「状況」という概念によつて持続すると同時に、「startling」と「Sterne」という「音」の連想による反響的效果も、作者としては計算しているであろう。⁽²⁾

ところでナボコフは、マライアの頭の中に響いた椋鳥の声のさらに奥の方に、もう一つの反響音を聞き取っている。スターンの椋鳥の声を聞き取るマライアの「Firtation」のイメージが、あらたに『センチメンタル・ジャーニー』中の以前のあるエピソードと反響し合うのである。ナボコフによれば、それはまず漠然とした記憶としてオーステ

インの頭の中に存在していて、それが作中人物の脳中に乗りうつり、ふたたびそこでよみがえってくるような「文学的記憶」(literary reminiscence)による作用である。そのようにして喚起されたもう一つのエピソードとは、「路上にて、カレー」の章で示されるものである。

ドーヴァー海峡を渡ってカレーに上陸したヨリックは、パリまでの馬車を手に入れようと車置場(remise)に探しに出かける。カレーの宿の主人デサン氏がそこへ同行するのだが、その時ヨリックは、先刻やりとりのあつた聖フランシスコ派の「托鉢僧」の相手をしていたある「貴婦人」と出くわす。そこで微妙な瞬間をとらえたヨリックは、その婦人に腕を貸す。ところでデサン氏は、持ってきた馬車の「鍵」がどうしても合わないので、「五十回以上も」悪態をつくが、やがて間違つた鍵を持って来たことに気がつき、二人をそこに残して取りに戻る。その場に残されたヨリックは、婦人との間に「センチメンタル」な雰囲気を感じ取り、いわば身内の緊張を覚えつつ婦人の手を握つたまま動かない。二人の姿勢はある親密な彫像のように印象づけられるが、これは『トリストラム・シャンディ』にもあきらかな喜劇的静止とでもいふべき瞬間である。

デサン氏は、五十回以上も鍵に向かつてさんざん呪いの言葉を吐きちらしていましたが、やがて手にした鍵が違っているのに気づいたので。それに、鍵が開くのもどかしく待っていたのは私たちも氏と同じでしたし、二人ともこのトラブルにすっかり気を取られていましたので、私は殆どそれと知らずに婦人の手を握りつけていました。それで、デサン氏としては、婦人の手を私の手中に残し、二人の顔の方は車置場の戸口の方

に向けさせたままで、五分経つたら戻ってきますから、と言って出て行つたのでした。

すなわち「センチメンタル・トラベラー」であるヨリックが、「鍵」をきっかけにその「sentimentalization」の相手を得るといふシークエンスが、ここに出来あがっている。そしてこの後の八章にもわたって、この婦人をめぐるヨリックのさまざまな連想と恋愛感情の詳細な描写が行なわれてゆく。カレーの街でのエピソードは、この婦人との「センチメンタルな恋の取り引き」（「序文—馬車の中にて」——それもヨリックの方からの一方的な——に殆ど終始しているのであって、その「取り引き」の現実的なきつかけをデサン氏の「間違つた鍵」が与える、という訳である。

こうして、ナボコフが二人の作家の間に聞き取つた小さな主題——「鍵」がないために若い恋人同士（ヨリックの場合、その推定年齢をスターンの年齢によつてはかると四十五歳頃だが、ナボコフにとつては若いと記憶されたか）が話を交わすチャンスを得られ、それが大きな主題へとつながる契機を与えるという——は、作家がその先輩の作家を、語句・イメージ・状況において無意識に真似てゆく一つの方法を明らかにしているのである。これは単に、作家同士の間の安易な影響関係として捉えられるような問題ではない。それは影^{インフレーション}響^{レゾナンス}というよりも共鳴^{レゾナンス}とでもいふべき問題であり、作家が他の作家より得た語句・イメージ・状況を自己のうちに独自に消化し、独自に再創造しようとする根本的創作方法の秘密をここでのぞかせているのである。

ところでローレンス・スターンの場合、こうした方法についての議論は、古典作家や説教家からの（剽窃）の指

摘を極論として、そうした指摘のみに留まらない場合であっても、おおむね外在的影響関係によって論じられる傾向があったと言つてよい。ラブレ、バートン、セルバンテス、スウィフト、ポープ、ロックといった、「博学の才人」(D・W・ジェファスン)の伝統に組込まれるような名を含めて、影響関係の対象としての文人達の名がただちに思い浮かぶ。スターンのように下敷の多い作家の場合、批評がその方へ赴くのは当然である。が、ここで考えてみたいことは、他の作家・詩人から借用した発想のポイントが、作品の中でじっさいにどう動いてゆくかということである。つまりそのポイントを作品へ返すこと、あるいは作品の全体性へのプロセスの中でそれがどう生かされているかということである。そしてスターンの場合、その作家としての出発点において、すでにこのような記憶と反響の問題が始まっていたように思われる。ここに言うスターンの作家的出発を画した書き物とは、『権争物語』(一七五九)というバーレスクであるが、その中に、ナボコフが探り当てたデサン氏の「間違つた鍵」のエピソードよりさらに以前の、スターン自身さえその記憶の連続を意識してはいなかったかもしれない、同じく「鍵」のモチーフを章題に置いた「鍵の章」という一章が組込まれているのである。このことについて考えてみることににより、こうした問題への最初の手がかりが得られるかもしれない。

『権争物語』の中の〈鍵〉

スターンがその作家的出発点において政治的論争用のパンフレット『権争物語』を書いていたことは、あまり知られていない事実かもしれない。じっさいこの、ヨーク地方の教会内部の権力争いをきっかけにして生まれた書き

物は、その諷刺の効果があまりにも直接的であつたために、作者であるスタンには教会当局から文字通り「焚書」が要求されたのであつたが、五百部あまり印刷されたうちかううして三、四部だけがその運命を免れた（W・L・クロスの伝記に拠る。A・H・キャツシユの新しい伝記では「六部」であつたことを傍証によつて示唆している）というほどの偶然の産物である。『権争物語』が書かれたのは一七五九年一月二十日であるが、『トリストラム・シヤンディ』を書き始めるのはその翌日の一月二十一日から同月末までの十日間のあいだということになつている。そうであれば『権争物語』という諷刺的喜劇的作品は、『トリストラム・シヤンディ』の世界の誕生を準備した習作のようなものだったのである。そしてこの習作の中にすでに、先輩作家・作品を利用して自らの作品世界を構築するといふ、スターンの基本的創作方法上のパターンが出来あがっていることは注目に値する。

『権争物語』の全体の構成は、次のような五部の書簡形式を基本にした構成を取っているが、主要な「物語」の要素は、(i)の「ロマンス」と(iii)の「アレゴリー」形式をとつた部分にある。先の第一章でも示したことであるが、構成の順序は次のとおりである。

- (i) 「権争物語」
- (ii) 「追伸」
- (iii) 「鍵」
- (iv) 「ヨークの某氏へ」
- (v) 「トパム博士へ」

このうち(iv)と(v)は一七五九年一月二十日に印刷屋に渡す直前の手紙であり、(iv)は印刷屋のシーザー・ウォード宛、(v)はトパム博士という、この物語で△寺男兼犬追い役▽ (Sexton & Dog-Whipper) のトリム (Trim) として敵役で登場させられる教会弁護士だった人物への書簡である。シーザー・ウォード宛書簡では、このパンフレットの作者としてスターン自らが名乗りをあげていることが注目される。(i)から(iii)までの書き物はまぎれもなく「私自身の頭脳から出て来たもの」であることを主張し、この「ロマンス」の一言半句、一句読点をも動かさないようにと念を押している。最後のトパム博士宛では、トパム博士が教会の内紛に関連して出した三種のパンフレットの一部の事実関係について異議申し立てを行ない、トパム博士の「キリスト教徒にふさわしからぬ揶揄表現」をいさめ、「そんなあてこすりばかりやっていると、やられた相手よりはやった本人の貴殿の方がよけいに傷つくことになる。はじめの怒りが静まれば、いつそう悲嘆にくれるのは却って貴殿の方ということになろう」というふうに懐柔していつている。これらの二つの書簡には、スターンの作家意識のようなものがすでに現われていると言つてよいかもれない。(i)から(iii)の部分は、現実の人物・事件・場所のモデルに沿つて書かれたものではあるが、いつのまにかスターンの中に、それらの現実を虚構化する方法があきらかになつていたように思われる。そして、物語の部分を通じて見られる諷刺と笑いの雰囲気は、われわれが『トリストラム・シャンディ』の中にも見出すものである。

順序が逆になつたが、(i)の「ロマンス」を見てみよう。これは全体が差出人・宛先不明の書簡という体裁になつている。差出人つまり「語り手」は、最近「私達の村」(じつはヨークのこと)で起こつた或る騒動のことから語り始める。それは、△寺男兼犬追い役▽のトリムという男が、△教会庶務役員▽の△ジョン氏▽から(十年前に)

譲り受ける約束ができていた△黒いブラシ天の古い半ズボン▽（‘An old-cast-Pair-of-black-Push-Breeches’）が約束通りに貰えなくなったために惹き起こした騒動である。ところでこの手紙の相手の方は、これ以前に既にトリムという人物についての悪い評判を聞き知っているという設定になっている。語り手は、このいわば「親しい読者」に向かつて、「今回この事件の顛末を詳細かつ十分にお話し申し上げましょう」と言うのだが、すぐさま「しかしお話を始めます前に」と半畳を入れるように、話を「私達の間に起こったこの騒動の真の原因」に関する「相手」の誤解を正す方へと持ってゆく。こうした間の取り方についてマーク・ロバリッジは（シクロフスキーを援用して）‘retardation’の方法として説明するが⁵⁾、いうまでもなくこれは喜劇的方法であり、われわれが『トリストラム・シヤンディ』において延々と話の要点を引き延ばされるあの感覚が、すでに始まっているのである。さてその真の原因をなした事件とは、トリムが、ジョン氏とは別に、或る△教区牧師▽との間で惹き起こした△古い夜番外套▽（‘old Watch-Coat’）をめぐる事件である。この古外套は長いあいだ教会に掛けてあったものだが、トリムはこれに強い執着を示して、△教区牧師▽からせびり取ろうとする。トリムのつもりでは、この古外套を冬用に仕立て直して、「彼の妻のためには△あたたかいペチコート▽に、自分用には△ジャケット▽に」しようというわけ。この「衣裳の改変」という小さな主題は、あきらかに『桶物語』で「教会」のアレゴリーとして出てくる「上衣」の応用である。ところで語り手は、このようなスウィフトの主題を響かせたすぐその後のパラグラフで、スターン独自の語りリズムを伝える。それは、心理の説明を一般論から個別論へと進めるやり方であり、また「観念の連合」（ロック）の応用のパターンである。語り手は言う。

強い側隠の情と称する人間の心理を支配する一原理は、寛大な精神を駆り立てて正当な行為の範囲を越えさせるものだということを、貴殿は良くお感じになつておられることですから申し上げる必要もありませんが——じつは件の△教区牧師▽は、あやうく、まさにこの犯罪の名誉ある見せしめ者となるどころだったのです。——と申しますのも、△ペチコート▽——△あわれな女房▽——△あたたかい▽——△冬▽というような言葉がはつきりと先生の耳に入るや否や、先生、胸にほつと火がついて熱くなり——トリムがその嘆願の終わりでまでよう行かぬうちに△包み隠しのない心の広い紳士でありましたので、心の底からよろこんでその申し出を受け入れますよ、とトリムに返事をされたのでした。⁽⁴⁾

そして、この「衣裳」のイメージは、『トリストラム・シャンディ』第三巻第四章ではさらに次のようなスターン独自の深まりを見せていると言える。

人間の肉体と精神とは、これはそのどちらにも最大の敬意を払いつつ申すことですが、まさに胴衣とその裏のような関係で、——一方をしわくちやにすれば、——他方もそれにつれてしわくちやになってしまいます。ただしこの場合、一つだけ確実な例外があるので、それはその着ている男が非常な幸運にめぐまれて、表はゴム引きタフタ織製、その胴裏はうす絹またはうすいペルシア絹でできたのを着用しているという場合です。(中略) 善良で正直でものを考えない三十人ほどのシャンディ家代々の人々、——この人たちはみな、自分らの胴

衣がこのような仕立てになっていると信じていました——つまり、その表側のほうをどんなにしわくちゃにし揉みくちゃにし、どんなに折り目やたたみじわをつけ、どんなにずたずたになるほどむしつたりこすつたりしようとも、——簡単にいえばこの上はないほどに乱暴に扱おうとも、なおかつその内側のほうは、それだけの手荒なしぐさにもかかわらず、ボタン一つちぎれはしないものと、勝手に考えていたわけです。(朱牟田夏雄訳)

『権争物語』の「夜番外套」は、トリムすなわちトパム博士が、その息子エドワードのために狙った「財務裁判所及び遺言事件裁判所代理」の特許のアレゴリーであり、トリムの「妻」はトパム博士の息子エドワードのアレゴリーであり、こうした「格下げ」による諷刺の感覚の背後にスウィフトの存在が感じられるのであるが、『トリストラム・シャンディ』での隠喩としての「衣裳」の使い方を見ると、スターン独自のヒューマールの形式である「シャンディイズム」の主調音がそこに流れていることが認められよう。

さて、件の「教区牧師」は着任後日が浅く、何かとトリムの世話になっていたので、彼の願いを叶えてやろうと思う。が、念のために「夜番外套」の請求権の所在を確認したいと願ううち、たまたま「市民兵団所属の治安官」に連れられて「町の人夫」が、自分の年齢を教会戸籍簿で調べてもらうためにやってくる。そこで戸籍簿を開けてみると、表紙の裏側に例の外套に関する「覚え書」が張りつけてあった。それによると、この外套は「寺男とその跡継の者たち」だけに使用権があり、これを「冬の冷たき夜中や、終禱及び弔いその他の鐘を打ち鳴らす折に」使用すべしとある。これで「教区牧師」はトリムの請求の不当さに気づき、公平を期して「教会庶務」のジョンに卜

リムを訊問させる。その場には教会の世話役達も同席している。トリムはそこで、自分が励んできた数々の「奉仕」を楯に自分の請求を正当化する。トリムが数え上げる「奉仕」の項目は、靴みがき、卵の買い出し、馬の世話、血止めのためのクモの巢取り、室内便器の借用のこと、といった取るに足りないことであるが、それらを語る一節はこの「ロマンス」に小説的広がりを与えている。トリムの抗弁はその場の者たちの笑いに一蹴され、トリム追放が決議される。しかしこれに不満のトリムは、今度は訊問役に当たった庶務のジョンを攻撃し始める。その原因が、十年前ジョンとの間で約束のあった八黒いブラシ天の古い半ズボンVであった。

物語はここで冒頭のトピックへと戻り、八半ズボンVをめぐる「合戦」話が展開する。トリムとジョンの間に八半ズボンV譲渡の約束が成立して二ヶ月過ぎた頃、「今は故人となった、前の教区牧師」が、ジョンの八机Vのことで一騒ぎを起こす。これも実はトリムの仕掛けた騒動で、物故した牧師にジョンの八机Vが「規定よりも四インチ高く、牧師自身の机と殆ど同じ高さ」にあつて不当である、とたきつける。「謙遜」の美德から遠かった牧師は、ジョンに八机Vの高さを「当然の位置まで下げるように」言うが、ジョンは自分に責任のないこととして拒否する。この後すぐにトリムは牧師館で「ある取引」をし、トリムの「服装が突然打って変わって見栄えが良くなった」ことが語られる。ここに出てくる八机Vというのが、実はスターンがまき込まれた教会の内紛の発端をなした、ヨーク大聖堂の説教壇の、現実の「鍵」に対するアレゴリーである。『権争物語』出版に先立つ十二年前、スターンのケンブリッジ時代の友人ジョン・ファウンテン（これが八庶務役員のジョンVのこと）が「首席司祭」に任命された頃から、この司祭と、当時ヨーク大主教であったハットン博士（これが八物故した牧師Vのこと）と対立し、スター

ンはジョン・ファウンテンの側につく。二年後ジョン・ファウンテンの配慮によって「ピカリング及びポクリントン特別教区法廷主教代理」の地位を得る。これが△半ズボン▽として出てくるものだが、これに加えて、物語前半の騒動の種である△夜番外套▽という二つの主要なアレゴリーの背後に、実は大聖堂の説教壇の「鍵」の記憶が潜んでいたことは、『トリストラム・シャンディ』の世界を開く「鍵」としてのこの「ロマンス」を考えるうえで、極めて暗示的である。

さて、トリムが新しい衣裳を身につけているので、ジョンは古い△半ズボン▽の方をトリムに諦めさせ、マーク・スレンダーに譲ることを承知させる。トリムがこれに従った訳は、他にも「緑の説教壇用のビロードのクッション」(「ヨーク大聖堂首席司祭^{ディーン}および参事会^{チャプラー}会員代理」のアレゴリー)を、再びジョンを甘言で欺いて手に入れる心算だったから。△半ズボン▽を譲られたマーク・スレンダーは、間もなく亡くなってしまい、「それでズボンはロリー・スリムという△不運な男▽の所有するところとなり、今でもその男がそれを着用して」いる。このロリー・スリムとはスターン自身を韜晦させた人物である。ロリーは「陽気な心の持主」であったので、この半ズボンをはいてトリムに得意気に見せつけたい気持ちもあつた、と語られる。そして、以上の様な関係のまま、これらの事件は、「十年近くの間ねむっていた」のである。

物語の時間は、ここで△夜番外套▽事件の最終部へと再び戻ってくる。トリムの追放が決定された後、「つい先週のこと、トリムが町に通じる公道でジョンに会い、百人もの人々の面前で彼を侮辱するという仕儀」に至る。ジョンは冷静にこれに耐えて民衆の同情を得、逆にトリムは「審問」に再び付されることになる。「ロマンス」の最後の

パラグラフでは、民衆の一人が、トリムの小銭をかせぐやり方を、教会の「大時計」のねじ巻き、「モグラ捕り」、「ウサギ捕り」といった例を挙げて嘲笑する。再び哄笑の的になったトリムの滑稽な姿が、スローモーションのように描かれるのが印象的である。ロリー・スリムも、「丁度通りかかった歯抜けの婆さん」と共にこの哄笑に一役買っている。そしてトリムが最後に「ゆるりゆるりよたよたと」歩き去る様子を告げて物語は終わる。

シャンディ・ホルルの鍵

以上の「ロマンス」の物語に対する絵解きとなるのが(iii)の「鍵」の章であるが、このアイデア自体、セルバンテス流の「拾われた手紙の解読」の応用であり、またポープの『髪盗人』に対する絵解きとしての“A Key to the Lock”（一七一五年）の応用でもある。ポープが、「葉種屋」エストラス・ヴァーニベルトの名で書いたこの文では、物語を三つのレベルで説明する。一つは政界、二つ目はエピソード内の感情的性格、そして三つ目は宗教のレベルによるのである。政界のレベルでの対応関係によつて示せば、「ベリンダ」||グレイト・ブリテン、もしくはアルピオン、「クラリツサ」||レイディ・マサム、「男爵」||オックスフォード伯、ロバート・ハーレイ、「サレストリス」||モールバラ公爵夫人、「サー・プリューム」||ユージン皇太子となり、宗教のレベルで示せば、ベリンダは「カトリック、もしくはバビロンの売女」であり、彼女の胸の十字架は「カトリックのしるし」であり、「風の精」たちは、「守護天使および守護聖人」となり、中に「衣裳」のそれぞれの分担を担った精霊は、人間の肉体の各部分の安全を守る「聖人たち」と対応していると説かれる（「衣裳の分割」のモチーフがここにも響いている）。スターンが『トリス

トラム・シャンディ」の作家となるまでの文学的素養を培ったものとして、友人のジョン・ホール・スティヴンスンの「風狂館クレイジー・カール」と呼ばれる居城に集まったディレッタント的集団「デモニアックス」の存在を忘れてはなるまい。これは「スクリプリーラス・クラブ」のいわばヨーク版のようなものとしてスターンに影響があったと思われる。この「鍵」の章が、ポーパからヒントを得て書かれたとしても不思議ではない。

「鍵」の章の冒頭で、新しい語り手は、「ロマンズ」が不運にもヨーク大聖堂に落ちていたのを、この町の「ある小さな政治クラブ」(「桶物語」における「グランド・コミッティ」のエコー)によって拾われ、クラブの会合の晩、公然と読まれることになったことを告げる。まず「議長」の説では、「トリム」||フランス王ルイ一五世、「教区牧師」||ジョージ二世、「ジョン」||プロシア王、「教会世話役」||ドイツの諸侯、「マーク・スリム」(マーク・スレンダーとロリー・スリムの二人の名を合わせた冗談)といった重要でない人物たち||元帥、將軍達、「古い半ズボン」||サクソニー、「夜番外套」||全ヨーロッパ、となるが、この説明の間にも、牧師やら市参事会員やらが異論を唱える。次に「ウィリアム王及びアン女王戦争史が頭に詰って湯気でも出そうな」二人の紳士が、「夜番外套」||「分割条約」、「半ズボン」||「スペイン及び西ドイツ諸島」の説を持ち出す。

ちなみにそれは、と紳士が申すには、ウィリアム王の全生涯の中でもっとも不幸かつ恥ずべき処置だったのですぞ。あの誤った一歩が、そしてあの一歩こそがです、と彼は自分の椅子から起ち上がり、テーブルを手でどしんと叩いて、あの誤った一歩こそが、(彼はまた額に八の字を寄せ、パイプを下にぱつと投げ捨てながら言

う)、あれこそが、我々がまさにこの瞬間にも感じまた嘆くところの、すべての混乱と悲しみの原因をなしたのです！ トリムが△半ズボン▽を放棄したことは、いいですか皆さん、それは殆ど逐語的に、フランス王と皇太子の、スペインと西ドイツ諸島の放棄を模倣したものです。それらは全世界によく知られているように、△半ズボン▽の場合もまさにそうですが、時至れば返還してもらおう目的で放棄されたのです。

これは、ウォルター・シャンディの原型的人物であり、トリムと共に注目すべき存在である。そして、以後、薬剤師・地理学者・仕立屋・靴屋・弁護士・外科医・薬種屋・葬儀屋・吃音の会員達それぞれが物語を「翻訳」してゆき、最後に議長がすべての意見の書き留められるべきことを主張し、それが物語に対する「鍵」となろうと結ぶ。最後に錠前屋が落ちをつけてこの狂想劇は幕となるが、ポープの絵解きが単にそれだけに留まっているのに比べて、スターンの「鍵」の方はより大きな主題への広がりを獲得している。何故なら、「鍵」の章に見られる△連想ゲーム▽の原理は、やがて『トリストラム・シャンディ』における“hobby-horses”の跳梁をもたらすことになるからである。それ故『権争物語』から『トリストラム・シャンディ』へと至る道は、現実の時間的間隙以上に近かったのかも知れない。

注

(1) 吉田安雄監修(注釈版) *Mansfield Park* by Jane Austen (関西大学出版部、一九八一年) 第一巻、解説 (pp. xvii-xxii)

参照。

- (2) G. D. Stout, Jr., ed., *A Sentimental Journey* (Berkeley and Los Angeles : Univ. of California Press, 1967), p. 197n.
- (3) Mark Loveridge, *Laurence Sterne and the Argument About Design* (London : Macmillan, 1982), p. 21.
- (4) 引冊は Ian Jack, ed., *A Sentimental Journey through France and Italy By Mr. Yorick with The Journal to Eliza and A Political Romance* (Oxford and New York : Oxford Univ. Press, 1984) 226頁。なほこの一九六八年の引冊は OEN 版に比へて「注」の部分に貴重な改良が見られる。